ゼロ使にチーターあらわる

(9ω9)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロ使にチーターあらわる

【Ｎコード】
Ｎ４１３８Ｕ

【作者名】
（９ω９）

【あらすじ】
チーターは動物の方じゃなくてチート転生者である。
ゼロ使にある魔法で”錬金”というものと”固定化”とはチートだと思う
だから錬金とヒーリングを限りなく強化するチートを選ぶ
そこは固定化じゃないのかよという人はいるかも知れない。俺もそう思うけど
錬金→物質を創り変える
ヒーリング→キメラ作れる（想像）

人の心臓にヒーリングかけまくって心筋を死なせれば一発という妄想してるんですができますかね。まぁとにかくそんな感じで

第一話　転生させる側（前書き）

（　＾ω＾）おっおっお

第一話　転生させる側

ｓｉｄｅ　とある神

フォッフォッフォッフォ今日も人間観察でもしてようかの

ん？なんじゃあいつの運命は、未来視は楽しみが減るからしたくないんじゃがノゥ

フォッ？！

あ、あの少年がうんこしてる間に思いついた事を喋ったら不老にする方法をクラスメイトが思いついてそれが数百年後に実現されるじゃと？！い、いかん、わし変な物見てしもうた。

しかしのぅ・・・老衰するから楽しくなるのに不老になんぞなってしもうたら楽しくないわい。

それにこれは神の領域とか言うて過激派が出て人間を消してしまうかもしれん。

あと数千年は人間で時間潰そうと思ったのにこれはいかんな、どうしようかのう。

やはり殺そうかの、じゃが、勝手な事したとバレたら降格されてしまうかもしれん。

こういう事は相談したほうがええんじゃがコヤツがうんこして思いつくのは明日じゃからのう…あ奴らは気が長いから気にしないかも

しれんわい。って明日?!いかんいかん、どうすればええんじゃ

いや待てよ?確か若い連中が転生ゲームとか言うて人間の世界の物語の世界をつくって人間がほしがっていた力を与えて放り込む遊びがあったのぅ

あれなら魂の総数を見れば変わらないからバレにくいし、有りなのかもしれんのぅ。

いっそ魂総数を減らして次元の間に落ちたから消えましたっていうて自分で作った魂放りこめばいいんじゃなかろうか。

よし、それでいこう。

早速転生トラックとやらをぼっしゅ貸してもらいに行こうかの。

ｓｉｄｅ　転生者予定

うートイレトイレ
今トイレを求めて全力疾走している俺は
高校に通うごく一般的な男の子
強いて違うところをあげるとすれば
隠れ中二病を患ってる事かなー
名前は…えっ

この時、僕は走馬燈を初めて見た。なぜなら目の前にトラックが突っ込んできたからだ。

よくみたら青信号が点滅している。あれ、別に大丈夫じゃね?

安心した瞬間

ドン

気を失った

第一話　転生させる側（後書き）

好きにやるお
どうせこれもこれもエターになるんだお

第二話　チート＋α（転生）（前書き）

（　＾ω＾）おっおっお

この話で出てくる事は全部嘘だお、騙されんじゃないお。なぜかどこかの版権キャラの描写に見える物があるけど、それは中国製のパチもんって奴だお、騙されてはいけないんだお。

第二話　チート＋α（転生）

神様が殺した男、山田はキメラが大好きだった。どれぐらい好きかというと、
小さいころキメラを自分で作りたくて7際頃に動物を殺して接着剤で頭をくっつけ直そうとするのを繰り返し、親に病院連れていかれて強制矯正された程だ。
そして生き物を殺すのをやめたかと思うと、ぬいぐるみを欲しがるようになった。
ぬいぐるみの首を切り落として他のぬいぐるみの首をくっつけることにしたのだ。
よって、彼の部屋の中は変なぬいぐるみでいっぱい。外ではぬいぐるみ作りが趣味です（ニコ）
みたいなことをしているが、彼のつくるぬいぐるみは表に出す物以外全部熊のプーたろーボディの魚やキュピーの首が挨拶猫さん的な事になっている。最高傑作の（最もひどい）物は鳥の足、人間の手、龍の尻尾、白黒熊の体、魚ぬいぐるみの目が縫い付けられた白い糸目の犬の頭でできた人形である。最近はパソコンでキメラＣＧを作るのに凝っている。

知らない天井だ

きっと病院なんだろうな

そう思っていた頃もありました（＾ｑ＾）あうあー

「すまん、ほんとうにすまん！許してくれ！」

目の前でひろみちお兄さんを連想させるさわやか系のお兄さんが必

死こいた顔で土下座してる

なぜ土下座してるのかは本人が「すまん！まさか僕の息子が玩具のトラックを人間の世界で遊んでいたとは思いもしなかったんだ！」らしい

「お詫びにチート転生させてやるから許してくれよ、なっ？」

とたんに悪そうな笑い方をしてこんなことを言ってきた

「どこの世界にですか？」

そう、これが一番気になる。世界に合わせたチートじゃないと発動しないとか洒落にならないことになったら困るからだ。

「あーいい忘れてたな、そうだ、ゼロの使い魔なんてどうだ？」

「わかりました」

世界観は覚えてる。そしてそこにはキメラがいる

「ほら、なでぽとかニコポとかでハーレムだぞ？なでぽとかニコポの汎用性は高くてだな、まず惚れさせる→僕の言う事何でも信じてね☆→ある事ない事→お金おいしいれすー（＾ｑ＾）出来るんだぞ？すごくないか？クソー俺も妻がいなければやろうかとちょっと思ったのにー」

本気で悔しそうな顔で「あ、これナイショな？神様とのひ・み・つ？」マジキメェ

「じゃあ願いを一つだけ叶えてください」

「いいよいいよ、ちなみに神様にしてとか言ったら問答無用で最下位の神にしてこき使うから」

「生まれはガリアの貴族、生まれは原作の１００年ほど前。
ヒーリングと錬金以外使えないが、なぜかその二つは使えば使うほど青天井に進化していき、
樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）以上のスペックで、ある魔術の禁書目録で出る学園都市に出る全ての超能力と魔術を同時運用しても余裕を持って耐えられて、劣化が決して起きない記憶容量無限の脳みそを持ち、
体中の細胞の寿命と分裂の回数上限が無限であり、
銃火器製造技術とキメラ製造やキメラに対する知識を持ち、
モンハンの生物を無代償で創り出せる”ごく”普通な人間にしてください。」

「ごく普通？なんだろう、僕の知ってるごく普通と違う気がする」

「まぁ奥さん、遅れてますわねー」

「そそそそんな事ないザマス、やってやるザマス」

「キメェ、これがごく普通な分けねぇだろ」

やべ、つい本音が

「きーさーまー、よくもいうたなー（棒）うぇい！」

（＞＜）シ
→こんな顔で腕を振り下ろす

「あーれーってあれえええええええ?!」

のりであーれーとか言ってたら本当に言うハメになった、地面に穴が開いて落ちてったのだ。

「ちくしょー覚えてやガレー!」

言ってて恥ずかしくなったからフォローいれとく

「俺は忘れとくからなー!」

うん、これでカンペキ

第三話　早く魔法使いたい（前書き）

（　＾ω＾）おっおっお

第三話　早く魔法使いたい

生まれて間もない子供、それが俺！ヴィクター・セルベイヌ・ボイオス・ド・アルグレイ

子爵家だＺＥ！

すみません、調子乗ってました。子爵家とかしょっぱすぎだろｊｋ

普通に貧乏貴族やんけ、どないしよ

それより赤ん坊時代だ赤ん坊時代、さっさと情報収集するぜ！

ーＮｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ

神のキングクリムゾン！

よくあるキングクリムゾンですが、本家はたったの数秒しか飛ばせません。なぜ年単位で飛ばせるか不思議です。神様なら仕方ないと私は思います

ーＮｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ

ーーーーーセルベイヌ　５歳ーーーーー

はい、セルベイヌ５歳です。前世の記憶＋ツリーダイアグラムで起きてる間にどんどん分析されていき、一度聞いた言葉はすべてわかりました。ていうか前世の記憶全く意味を成しません。

全部このツリーダイアグラム＋で解決されます。さすがにこれはや

り過ぎましたね。
筋肉が成長していなかったため、全然しゃべれませんでした。

「さて、今日も今日とて書庫に忍び込むわけですが」

ツリーダイアグラム＋で屋敷のみんなの動きを予知して！避けて！書庫で情報を仕入入れる！的なことをしてます。というかしたいです。
一度読むだけで全部覚えてしまうというインデックス状態だという事が発覚したので速攻で終わると思ってたんですが、避けて書庫に行くという行為は僕の肉体レベルではきついですね！
実質筋トレ替わりにやってます。書庫入ったら入ったで安心して眠っちゃうしね！

2，3回バレそうになった。脳みそがぎりぎりまで時間測って起こしてくれてたけどいらんスリルを味わったぜ。

さて、4歳時に初めて見たあの魔法を見て、僕は来る日も来る日もお父様に

「父上様、父上しゃま、魔法をつかえたいんでしゅが」

と言いつづけ、ついに

「…5歳からでどうだ」

「やっらー！ありがとう父上！大好きです！」

「お、おお」

顔を赤くしてました

いやー、この頃はまだ滑舌がまだ悪かったですね。

まぁそれはいいとして、今日は5歳の誕生日、私はまだ約束を覚えてるわけです。

「父上様！今日で私は5歳です、早く魔法を使わせてください。」

「ん？魔法？なんのことだ？それより今使用人に特大クックベリーパイをつくらせてるからな、普段は無理だが、今日は特別だぞ」

「なにをとぼけてらっしゃるんですか！私はま・ほ・う！を教わりに来たんです！去年約束されたじゃないですか！」

「し、しかしだなぁ」

「約束を守らないのですか？平民にならともかく、私は一応父上の子、貴族の一人ですよ」

「う、ううむ」

「もういいです、父上は嘘付きって事がわかったのでサランドルに言ってきます」

サランドルは父上様の家臣の一人で、私の見立てではロリコンです。

「な、なにぃ？！な、なぜよりによってサランドルなんだ」

「サランドルが自分の裸をじっと見ててくれれば魔法を教えてくれ

ると言ってくれましたゆえに」

もちろん嘘です。ですが父上様はサランドルがロリコンだと知っていると判断した上で言ってます、きっと今父上様の中では家臣だから手を出さないのでは、と見てるだけなら手を出してないと言えるという考えで戦っています。私の見立てでは８６％の確率で成功するはずです。

「わかった、だが杖がないから杖が着てからだな」

「サランドルによれば杖以外にも剣やアクセサリーを杖替わりに出来るそうですが」

剣とかアクセサリーは二次創作物では定番なので言ったのですが

「あやつめ、余計なことを言いおって…」

成功です

「ではお母様から何か譲ってもらいますね」

「待て待て、それならこれをやる”錬金”」

そう言って渡されたのは翡翠のかんざし…だった指輪

「まぁ宝石だからな、時間をかければ大丈夫だろう。杖の方がいいんだが、杖が来るまでの凌ぎだ。いいか？くれぐれもサランドルに近づくんじゃない、話しかけてもダメだ。いいか？絶対だぞ？もし破ったらサランドルもお前も大変な目に合うぞ、それに魔法も絶対教えないぞ」

私の脳は言っている。大変な目に合うぞは本気だが後者は嘘だと。
まぁ自分の娘が魔法使えないとか恥ずかしいもんね。
…あれ、言ってませんでしたか？私、女の子です。
まぁいいでしょう。今回の目的は達成したので、おとなしく父上様の分のクックベリーパイ美味しいですしに行きましょう。

第四話　杖と契約できないから創造神ごっこ（前書き）

（＾ω＾）おっおっおっ

第四話　杖と契約できないから創造神ごっこ

はーい、みんなのアイドル、セルベイヌたんだよー

今日はー、契約を初めてから1ヶ月とっくに過ぎた頃でーす。明日が2ヶ月とかチート転生者の一人として恥ずかしくて言えません！キャッ言っちゃった（＞＜）テヘッ

くそ、父上のバカ、できないではありませんか、グレてやろうかしら。イケナイイケナイ平常心平常心。とりあえず自分の気を紛らわすために使ってない使えるチート使おう。

モンハンの生物創造

で、どうやるんだろう。

ポンッ

なんかウィンドウ出てきた。幻覚かしら、こまったわねぇ

とりあえず、これ日本語だ。俺の脳が言ってるから間違いない

日本語忘れたと思ってたら読めた。ハルケギニア語に脳内変換されてツリーダイアグラム＋すげー。いや、私の脳みそですけど

このあなたも創造主！の所持権はあなたに譲与されました。

無断の配布および二次配布は許されておりません。
本製品はあなたのみ使用可能です。
出すときはアデアット、消すときはアベアットと唱えてください。
なお、この製品は直感操作が可能なように開発されているため、
説明書はありません。決してめんどくさいわけではありません。ご了承ください。

う、うーん、取り合えず説明書はありませんか。やってみよう

「アデアット」

出てくるのは半透明な緑色の四角形のウィンドウ

左下に色を変えるって書いてある

タッチして見ると赤、青、黄色、緑ｅｔｃ.

とりあえずいっぱいあった。

戻るを押す。

創造可能リストって書いてあるものをタッチ

モンスター、人、亜人と３つのジャンルにわかれた

モンスターはまた小型とか大型とか古龍などいろいろジャンルに分けられてる

人はハンター、村人、商人、鍛冶屋ｅｔｃ.

亜人はアイルー、メラルー、竜人の三種類だった

まじかよ、これはハイテク。早速アイルーを創ることにする

アイルー　♀
名前：仮面アイルー１号　得意食材：肉　☆３　色：ゴールド
ネコの調理術　招きネコの金運　ネコの解体術【大】
思考能力：あり　傾向：狂信→主人

ゴールドが一番可愛かった

メラルー　♂
名前：仮面メラルー２号　固有スキル：泥棒　色：カメレオン
攻撃力：５００００　防御力：５００００
思考能力：あり　傾向：狂信→主人

色変えてみた。カメレオンってなんぞって思ったら文字通りカメレオンみたいに背景と色が同化する。パネェ
あと攻撃力と防御力チートした。普通のドッドメイジで１００換算でスクウェアが８００
やり過ぎかも

まぁいいよね。次に家臣として竜人をチョイスしたいけどエルフだよなぁ、見た目。まぁしょうがない。遠い未来に夢見て

名前は技（調理的な意味で）の1号と（戦闘）力の2号からチョイスしたけどあえて言うまい

「「ニャニャニャー！」」

「ご主人様！命令をくださいにゃ」

「僕にもくださいにゃ」

「えーじゃあ抱き枕になって」

「えっ、1号行ってくるにゃ」

「いいだにゃ？ご主人様ー」

なんかこいつ目がちょっとぎらついてね？キメェ

「ゲフ、な、なぜなんだにゃ」

「2号、おいでー」

「で、でもご主人様、僕の力は大きいから…」

「大丈夫ダイジョブ」

ぎゅ

あーもふもふ

「あうう」

「羨ましいにゃ…妬ましいにゃ…」

こいつら性別逆じゃね？別にいいんですけどね

すー

第五話　アイルー普及計画（前書き）

（＾ω＾）おっおっお

第五話　アイルー普及計画

「セルベイヌ、セルベイヌ起きなさい」

うーん、あと１０分

「早く起きなさいったら」

あー布団がー

「なんなのよもーってお母様？！」

「やっと起きましたわね、なんなのですかこの子達！」

そう言って持ち上げるのは１号

顔赤くしてんじゃねーよメス

「そ、そんにゃに見つめにゃいで…恥ずかしいにゃ」

黙れ

「なんですかこのかわ…おほん、この亜人は！」

「庭で拾いました。でも別に害はないですよ？それはアイルーという種族で一度忠誠を誓った相手は決して裏切らない種族らしいです」

「だ、だとしてもどうして私にこの可愛らしい生物について一言言わなかったのですか。」

「いえ、言いに行こうとは思ってましたが眠くて」

「そ、それなら仕方ありませんわね、今度から気をつけてくださいまし。そ、それでちょっとこの子借りてもよろしくて？」

うわ、顔赤っ

「いいですよ」

「そ、そんにゃ…」

「その子1号って言うんですよ。ほら、1号、挨拶」

「こんにちわにゃ」

「あらあら」

顔赤いなぁ、可愛い物好きだったのか。今度アイルーあげようかしら

「1号、ちょっと仕えてあげてよ」

「えーご主人様以外は仕えたくないにゃー」

「わがまま言わないの」

「了解にゃ…」

「ありがとう、セルベイヌ」

「もしお母様に仕えてくれるアイルーが見つかったら返してくださいよ？」

「ぜひ見つけてくださいまし！」

満面の笑顔だ

「はーい」

嬉しそうに出て行く母上様

そして残るメイドたち

なんだろう

「あ、あの、お嬢様」

「なに？」

「その”あいるー”でしたっけ？その子はどこにいるんですか？」

「えー私にもわかんないわよ。たまたま前に庭でこの子とあの白い子がいてなんやかんやでついて来てくれたんだし」

「そうですか…」

「まぁ私はこの子に主に仕えたい子を探してきてもらうんだけど」

「も、もしよろしければ私にも探してくれませんか？」「私も」「あ、ずるい、私も！」

「それはこの子に聞いてよ」

「うーん、やってみるにゃ」

こっちみんな

「「「ありがとうございます！お嬢様！」」」

どうしよう。アイルー普及計画行おうかしら

第五話　アイルー普及計画（後書き）

メイドさんのこと忘れてたお
それよりいつになったらキメラ作れるんだお

それ以前に魔法が使えないというか契約できてないお、もう5話まで行ってるのにありえないお

第六話　これもはやネコバァだよね（前書き）

（　＾ω＾）おっおっおっ

第六話　これもはやネコバァだよね

紹介するとか言った次の日

「なんで私の部屋に一号がいるのかしら、それにベッドでクンクンって音がしてた気がするけど」

そうなのだ、食事が終わって部屋に戻ると一号と二号が私のベッドの前でしゃべってた。なんかいい匂いとか羨ましいとか聞こえたけど気のせいだ。二号がドヤ顔してたのも気のせいだ

「ご主人様！ご主人様のお母様なんか気持ち悪いにゃ、顔を真赤にして笑いながら頬ずりしてきたり匂い嗅いできたり、もぉ鳥肌がたって仕方ないにゃ！身がにゃふんにゃふん失礼したにゃ、代わりのアイルーを派遣してほしいにゃ」

後半スルーしやがったな、まぁいいや

「えーどーしよーかなー」

「御願しますにゃぁ」

なんか涙目になってきてる。しょうがない、私って甘い

「アデアット」

今回創るアイルーは一号のベースの色と同じで甘えん坊属性かな

アイルー　♀

名前：未定　色：純白　思考能力：あり
傾向：甘えん坊　好物：ハシバミ　説明：愛玩用アイルー

アイルー　♂
名前：未定　色：純白　思考能力：あり
傾向：甘えん坊　好物：ハシバミ　説明：愛玩用アイルー

「アベアット」

「「よろしくお願いしますにゃ、ご主人様」」

「うん、よろしくって違うから、私ご主人様じゃないよ？」

「にゃ、じゃあだれなのにゃ」「優しい人がいいにゃ」

「うん、一応私の母上様の予定。たぶん優しくしてくれるよ」

「やったにゃ」「期待しとくにゃ」

片方ツンデレかこれ

いや、これでツンデレ判定は余裕で早過ぎるよな

またたび有るか知らないからハシバミに改造してオスメスセットにしとく。

それにしてもいつ魔法使えるのだろうか。早く契約成立してくれー

キメラ作れないだろ（ボソ）

いや待てよ？もしかして

「アデアット」

モンスターで合成は・・・できそう

「あはン」

古龍をいきなりやるのは怖いから…
頭はエルペの性格、ケルビの角、ぽぽの舌、体はアプトノス、キモはガレオス、生む卵はアプケロス、たまに金色の卵になる。草を主食とする

とりあえず食用に特化した。ていうかこいつここで出したらやばいよな、外行こうか。
あ、でもこれどこで飼おうかしら、説明とかもどうしよう。他人に上げたくないしなぁ

「セルベイヌちゃん、白ちゃんがいなくなったんだけど…あら、ここにいたのね。あらあら、白が3匹？増えてるじゃない」

両手を口に当てて少しにやけてる。なんか嬉しそうだな

「母上様、2号がちょうど宛があったので連れてきてもらいました」

「「よろしくお願いしますにゃ」」

「ええ、こちらこそ。どう？私と一緒に来ない？」

「優しくしてご飯をくれればそれでいいにゃ」「ミー達がいやがる

事はやめてほしいにゃ」

「ええ、わかったわ。」

「契約成立にゃ」「やったにゃ、ありがとうにゃ」

そうだ

「母上様、お喜びのところ申し訳ないのですが、杖との契約って何かコツのような物はあります？」

「とにかく肌身離さず持っておくことかしら？」

「私は一応かれこれ2ヶ月ほど肌身離さず持っているんですが…」

「うーん、セルベイヌは杖を持ってるように見えないんだけど」

「いえ、私はこの翡翠の指輪を杖にしたいんです」

「そう…じゃあそれは魔法の媒体って意識しながら持って見るのはどうかしら」

「なるほど…年のために、魔法の呪文も教えておいて欲しいんですが」

「それは…」

うーん

「その子達の副を作るアテがあるんだけど…」

アイルーの服職人を作ればいいし

「ほんと?！」

「ええ、ですから呪文を」

「何が知りたいのかしら」

よく考えたら実の親に取引持ちかけるって変だよね。まぁいいけど

「金属を作り変える呪文と傷を治す呪文を教えてくれればいいですよ」

どうせこの二つ以外使えないハズだし

「イル・アース・デルとイル・ウォータル・デルよ、ほら早く早く」

「イル・アース・デルとイル・ウォータル・デル…はい、その方もアイルーなのでお呼びしますね」

「まぁ、でもそれもそうよね。いつごろいらっしゃるのかしら」

「明後日にでも…ですかね」

「楽しみにしてるわ」

「楽しみにしててください」

そういって新しいアイルー2匹を抱いて出て行こうとする

「あ、その2匹にまだ名前がないので考えてあげてください」
「そう？わかったわ、きっと素敵な名前を考えてあげる」
「感謝にゃー」「かわいい名前がいいにゃー」
うまくやっていけそうかね
さて、ダメもとでやってみよう
「イル・アース・デル」
ベッドの枕に向かって指輪をはめた方の手を降る。対象は枕の中身、イメージは砂だ。
ちなみに中身はなんかの動物の毛
「ま、ありえないよねぇ」
「なにができないにゃ？」
「一号は馬鹿だにゃあ、魔法に決まってるにゃ」
なんか言ってるけど気にしない。それにしても期待せざる負えない、実は契約できてても気づかなかったとかそういうオチに
触ってみるとやっぱり柔らかい、だめかぁ
期待してただけに落胆も大きい。精神的に疲れた気がする

持ち上げておもいっきり2号に投げつけて（一号だとどうせ余裕で受け止められる）八つ当たりしようと思ったらジャリって感触があれ、成功？

「これ、砂が混ざってるにゃ、不良品にゃ」

「！」

「もしかして魔法だったのかにゃ？」

「来たあああああああああああ！これは私の時代じゃないのかしら！」

思わずベッドに顔を突っ伏して叫んだ私は悪くない

第六話　これもはやネコバァだよね（後書き）

キメラのアイデア募集するお
マジで頼むお

第七話　モンスター保管の目処（前書き）

（＾ω＾）おっおっおっ

第七話　モンスター保管の目処

母上様にアイルーを献上して数日後

「アベアット」

アイルー　♂
名前：ボウグヤ　色：茶ぶち　思考能力：あり
傾向：職人気質　一匹狼　説明：アイルー防具職人

アイルー　♀
名前：フクヤ　色：黄トラ　思考能力：あり
傾向：職人気質　自信家　説明：アイルーの仕立て屋

こんな感じかな

「要はなににゃ」

「まぁまぁそう言うんじゃないにゃ、仕事があればやる、なければ休んでりゃいいにゃ」

「そうですね、母上様がアイルーの服をほしがっていたものですから”呼び出し”たんですが、あなた達用の場所ができるまで私の部屋で我慢してくれませんか」

「ふん」

「にゃ、私たち専用の部屋までいただけるのですかにゃ」

「ああ、親に頼んでみますがもし駄目だったら外に小屋を作る感じでもいいですかね」

「気に食わないにゃ、道具も場所も用意してないにゃんて」

「そうですにゃ、道具も場所も素材もないとどうしようもないにゃ」

「うーん、それもそうですね、ちょっと考えさせてください。しばらくは適当にくつろいでください」

「あまり慣れ合いたくないにゃ」

「あんなヤツほっといてみんなでお話しするにゃ、私はフクヤにゃ」

「キュートさに定評のある一号にゃ」

「え、ええと僕はカッコイイ？二号にゃ、よろしくにゃ」

仲良くできそうかな、それにしてもどうしようか、素材。

まさかモンスターをそのまま野放しにできるわけでもないしなぁ

「セルベイヌ、私だ、入って良いか？」

「あ、父上様、どうぞ」

「その、だな、契約はどうだった？」

「そうですね、できたんですが、母上様や義母様達から教えてもらった呪文で”錬金”と”ヒーリング”しか発動しません…」

これ以外使えないし。ていうか先手打たないと誰か先生役が来るかもしれないからね

「そうか…ところでその、アイルーといったか？」

「そうですよ、父上様もほしいんですか？アイルー」

「いや、そうではなくてだな、今まで聞いた事もない種族だから気になってな」

む、これはでっち上げを披露できる予感

「ああ、彼らによると元は異世界の種族らしいです。どうやら先祖様がサモンサーヴァントで呼ばれたらしいですよ」

「なるほど、それで、そやつらの部落はどこかな」

やばい、それは考えてなかった。いい考えないか（チラ

一号、眼があった瞬間嬉しそうにする。二号、不思議そうに首を傾げる。フクヤ、ちょっと冷汗流してる。どうやら私がその辺を考えてない事に気づいたようだ

「我らは地下に部落があるにゃ」

カジヤあああああ！ファインプレイだー！あとでいい子いい子してあげるよ！

「なるほど。つまりグランモールのような種族と？」

「いにゃ、我らをあいつらと一緒にするにゃ、我らは地下に大きな空間をつくって地下都市見たいな物を作っているにゃ」

すげー設定がスラスラ出てる

「そうか。最後にセルベイヌ、そいつらは信用できるのか？」

「できると思います」

私が作ったんだし。

「そこまで言うならいいだろう」

そのまま出て行く父上様。なんだろう、顔が始終厳しかった気がするけど

「あ！そうか、その手があった」

「にゃ！な、なにがにゃ」

「なんで私のパンツを持ってるのかな、一号」

「え、これは不可抗力にゃ、パンツの魔力にとりつかれてなんかいないにゃ」

「そうですか、そうですね。イル・アース・デル」

さすがにヨダレがついたパンツを残したくありませんからね

きっと漫画とかだと私はいわゆる怒りマークが頭に浮かんでるでしょう

そのおかげかパンツを砂に変えることができました。

「さーて、あなたの毛をくるくるパーマに作り変えてあげましょうか？」

「にゃっ、それは困るにゃ」

「遠慮しなくていいんですよ、フフフ」

「にゃー！」

ベッドの下に逃げ込んだか、まぁいい。

「何がともあれ錬金の練度を上げまくらなくては」

第七話　モンスター保管の目処（後書き）

おかしい、設定が全く本編に出ない。いや、３歳頃の誕生日でお披露目会とかあったよ？有力貴族との交流あったよ？設定上は
それに義母が３人兄が２人姉が１人居るのに一切描写書いてなかった。
領土はガリアの中央？よりで国境ではない。特産品はチーズと白ワイン、税率は７割で領主が商会と取引してガリアの６割以上がここで賄われてる。売上の内１，２割ほどは食料配布してる。戸籍導入済み。ていうか全民でチーズとワイン生産させてると言うけどね。
まぁ実際にあり得るかと言われたら問題だらけでありえないけど別にいいよね

まぁ要は裏設定と見せかけて普通に本編に書いてない設定を吐き出しただけ

第八話　一人称から離れてみる（前書き）

（＾ω＾）・・・

前回から数ヶ月たった感じだお

第八話　一人称から離れてみる

「さて、腹ごしらえに練習にでも行きますか。シュミレーションも終えましたし」

「？セルベイヌ、何か言いましたか？」

周りのセルベイヌの義母となる人々はまたかとでも言いたげな冷たい目で、兄二人はわれ関せずといった顔で、姉は一度眉を潜めなてチラ見し、すぐに取り繕う。母は不思議そうな顔をし、父は周りの反応に不快の感じを少し表すが、咎めようとしない。

「いえ、なんでもありませんよ、母上様」

満面の笑顔を見せるセルベイヌ

「そう、じゃあ頑張ってね」

「はい」

セルベイヌは内心ドキッとしつつも、顔には表さない。

そして

「お先に失礼いたしますわ」

姉は退室しようとし

「では私も」

セルベイヌもそれに便乗する形で抜け出す

あとはいつもどおり、シュミレーション通りに誰にも合わずに外にでる。

これが周りからおかしな子と言われる一因である、なにせ移動するとき、誰も彼女に会えないからだ。

もっとも、風のラインメイジで有る義母の1人だけは、気づいているが

さて、場所は変わって中庭、もとい木の近く。セルベイヌはひたすら唱えていた

「イル・アース・デル」

と

すると、彼女の足元は砂に代わり

「イル・アース・デル」

また唱えると、元の土に戻る

「イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アー…む、ちょっときついかも」

３０分ほど唱え、そう漏らす。実際、彼女はふらふらで、木の下で一休みをする。

普通に考えれば、土のライン以上ならまだしも、まずありえないことだ。

それに、彼女は未だに7歳の半分を超えた頃、これは異常と言わざる負えない。

不幸か幸いか、そのことを知らぬ平民の使用人しか彼女のしている事をしらない。

学のない彼女たちは、ひたすら同じ事をしてる変人と評価し、周りへ広める。

結果、アルグレイ家にはおかしな娘がいると使用人の中では評判であり、他の貴族との交流においても

あれがアルグレイ家の…だれ？ほら、例の錬金しかしない変な娘。あら、あれが。

などとやりとりされ、いやな意味で有名になっているセルベイヌである。

とにかく、彼女は物を砂に変えるという事にだけは、スクウェアにも負けないといえるのがわかるのは設定を知ってる作者だけである。

なぜかというと、彼女の願いでは錬金とヒーリングの魔法が”進化”していくといった、つまり、彼女の”錬金”は完全に”あらゆ

る”物を砂に変える事に進化を遂げているわけである。

閑話休題

彼女はこの日、計算していた。この精神力なら可能かと

結論から言うと、できると判断する。

「イル・アース・デル」

さすがに催促が厳しくなってきたのだ

たしかに素材育成所も必要だが、アイルー専用の作業場も必要である。

母上様は人間用の物を用意していたが、いかんせん使いにくいと苦情が着ているのだ。

故に、彼女は半分しかない小屋を作り始めたのだ。

「で、どうしますか？」

「とりあえず物を置く場所と作業台は最低限欲しいにゃ」

「出来れば分けてつくってほしいんですが難しいですかにゃ」

「そうですね、この壁をとっぱらってスペースをもっと広くする感じでもいいですか？こんなに待ってもらって申し訳ないですが、私の精神力は増えているとはいえ、まだ希望通りの物を作れるほど多くないもので」

「しかたないにゃ、だがそろそろ自分の空間がほしいにゃ」
「仕方ない奴だにゃ、私はまだ一号と二号と一緒にいたいから後回しでいいにゃ」
「そうですか、すみませんね。それではボウグヤ、どれぐらいのスペースがあればいいんですか？」
「お前ができる限りでいいにゃ」
「分かりました。少し狭いかもしれないですが勘弁して下さい」
そう言って、セルベイヌは家をコ状に作り、一面だけ開け、カウンターのようにする。
すると出来上がるのは、モンスターハンターで出てくる武器屋防具屋がいる家？のような物
ここまでにかかった時間は、実に４時間。
「似非モンハン仕様です、奥の方で物を作り、ここで物を出すって感じでどうですか？ダメならまた明日作り直します」
「いや、よく頑張ってくれたにゃ。感謝にゃ」
少し上から目線がいただけないが、満足してくれたようだ。そしてカウンターに上り、丸まって眠ってしまった
「お嬢様ー！ここにいらっしゃったんですか、もうすぐ夕飯の時

間でございます、皆様お待ちになってますよ」

「ああ、ありがとうございます」

セルベイヌはほほえみ、３匹のアイルーに支えられながらしっかりとした足取りで屋敷に入っていった。

「うう、あの子ほんとに可愛いわ…奥様が本当に羨ましい」

残されたメイドはトロンとした目でボウグヤを見つめていた

どうやらこの屋敷の女はアイルーに弱いようだ

第九話　仕事場錬成、および素材の確保（前書き）

（＾ω＾）おっおっおっ

ヴラド＝ツェペシュさん感想ありがとうだお、参考になるお。てかいずれやらせてもらうお

第九話　仕事場錬成、および素材の確保

ご飯を食べた後私は部屋に戻ってすぐ眠ってしまった

「う、うーん。ってもう昼？！」

「おお、目覚めたかにゃ。個人的には早く仕事道具だけでも揃えて欲しいんだにゃ」

「え、ええ、どうやら待たせてしまったようで」

「ご主人様！朝御飯は置いといてもらったにゃ」

2号がテーブルに乗ってるすっかり冷めた昼飯を指す

「気遣いありがとう」

2号を撫でてやる

「ご主人様、冷めてるから作り直しますかにゃ」

1号が対抗するように言ってくる

「ええ、あなたもありがとう」

そう言って2号も撫でてあげる

「おほん、早く食べて用意して欲しいかもにゃ」

「はいはい、そういえばフクヤはあれつくらなくてもいいの？」

「大丈夫にゃ、一応人間の奴でも作れない事はないにゃ」

「そう、余裕があったら作りますね」

「お気遣いありがとうにゃ」

一度話を打ち切り、さっさとご飯を食べる。相変わらず脂っぽい物かと思ったら固まるのを防ぐためか脂っぽい物はあまり無かった。助かる

「じゃあ、行きましょう」

「「「了解にゃ」」」

「早く行くにゃ」

ボウグヤ本当に待ちわびてたんだなぁ

「はいはい、5分ぐらい待ってから付いてきて」

いつもどおりシュミレーション始め、出よう

あれ、汗が止まらない、シュミレーション通りなら高確率で姉とメイドとかがアイルー取り上げに来る。やっぱり欲しかったのかなぁ

「女は度胸、何でも試してみるものさぁ」

とりあえず窓まで行って錬金で滑り台つくろうと思ったけど高くて

怖い。

そしてなにより精神力残さないといけない

次案として壁を階段ぽく錬成することにする。

昨日の錬金で物づくりの精神力消費が比較的減ってる傾向にあるから計算していけばいけるかなぁ。

「姉上様がくるから脱出よ」

手を握りしめて言ったら

「逃げる必要あるのかにゃ」

え

「1号、どういう事」

「普通に窓の下の方に錬金で足場つくって隠れればいいにゃ」

「その発想はなかった」

どうやらツリーダイア（ｒｙ発想まではカバーしてくれないようだ

あれ、普通に演算しなかっただけじゃね

何がともあれ、さっき思いついた事は封印し、

「イル・アース・デル」

結構大きめ？な足場を作り

「ほら、みんな早く、姉上様の愛玩用アイルーになりたくないでしょ。ていうか私はそのつもりであなた達を創ったんじゃないから私がいやよ」

みんなにゃーにゃー言いながら飛び降りてくる

そしてノックの音

「セルベイヌ、いますか？」

ねこなで声で聞きながら入ってくる姉

「あら、いませんの。相変わらずどこにいるのわからない子です事…」

そう言って帰っていった

「フゥー」

あれ、姉が高ランクメイジだったらなんかでバレてなかった？まぁ結果オーライだよね

このまま演算して

「飛び降りる！」

にゃ？！

アイルー達が驚いているが演算の結果ここから飛び降りる際に錬金で土を少し作りなおせばどうにか無傷って事は分かってイターイ！

ぐぅ、痛みの事まで計算に入れてなかった

「おーい早くおいでー」

顔は冷静を保ち大丈夫なふりをする。あいつらも巻き添えだ

「い、行くにゃー」

2号が飛び降りてくる。まぁ一番タフだからね

「あれ、ニャンともにゃいにゃ。みんなー早く下りてくるにゃー」

あれ、本当に大丈夫なの

次々と飛び降りてくるアイルー。全員平気そうな顔だ

演算すると体重的に軽いから余裕なようで。さいですか

「まず最初に…」

作者の知識不足により、Ｋｉｎｇ Ｃｒｉｍｓｏｎ。ボウグヤに必要な道具が揃い、ついでに建物の強化を終えたが、精神力の枯渇寸前まで行ってしまった女の子一人とアイルー４人、そして平民の家程度の建物が残る！

「もうダメ、寝させて」

「ご主人様ー！」

「2号は騒いでないでご主人様を運んであげるにゃ。余裕にゃ」

「後は素材…自分で狩るか…いや、2号、明日俺の代わりに素材集めに行ってくれにゃいか」

「ふぇ、了解したにゃ」

「ありがたいにゃ、代わりになんか装備つくってやるにゃ」

「やったにゃ！」

この日はこうして終わり、次の日

「セルベイヌ」

なにやら厳しい顔をした父上様と家臣となんか1号が2号の後ろに隠れて私をかばってる感じだけど

「大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫ですが…どうしたんですか？」

そうすると、父上様は苦い顔をしてこう答えた

「この亜人ども…いや、この亜人がお前に近寄らせてくれなくてな」

「余計なお世話にゃ」

「1号、2号、大丈夫ですよ？そんな気張らないで」

「で、でもご主人様、こいつが「こいつじゃない」この方が僕達がご主人様をこうしたっていって聞かないにゃ」

「そうじゃなければ何がある！昨日も朝は一緒に取らないし、昼夜は飯を抜いたと聞いたぞ」

「すみません、父上様。いかんせん魔法が面白く、つい夢中になってしまいました」

「…なに？魔法だと？」

「ええ、独学でどうやら”錬金”をやってみたところ、成功したものですから。このようにイル・アース・デル」

そう言って椅子の足を４つ同時に砂へと変える

「おお、これは凄い。」

ここで暗い顔をしなくては

「ですが、私には才能がないようで、錬金の魔法以外が一切発動しないのです」

「なんと」

「ですので、私はこの錬金を密かに鍛えてきたのです。せめてこの錬金が他の魔法を使えない事が些細に見えるように、と」

「おお、セルベイヌ、吾の可愛いセルベイヌ、最近普段にまして奇妙だと思っていたが、まさかそんな苦労があったとは…」

「申し訳ございません…」

ここで顔を崩すわけにはいかない

「よい、よい、外の誰がなんと言おうと、我らはお前の見方だぞ」

「父上…」

ここでうそなき！

「ありがとうございます！…うぅ」

「セルベイヌ…よしよし」

私をだきよせて撫でてくれる。最近廃スペック脳（誤字にあらず）だし少なくとも涙腺とか余裕でコントロールだろと思って練習しといてよかった。

Ｋｉｎｇ　Ｃｒｉｍｓｏｎ

「みっともないところをお見せしました。父上様」

「よいよい、くれぐれも無理するなよ」

「はい」

父は出て行った。さて、素材の問題はどうするかだ。

素材はモンスターからはぎ取る。だけどモンスターは殺さないといけない。殺すのは私には無理、２号に頼ってもいいけど毎度毎度はめんどくさい。ならどうする、死んだ状態で出せばいい。

最終的にはアカムシリーズ揃えてほしいかも。まぁ最初は金属のをつくらせよう

「アデアット」

モンスター→アグナコトル亜種→設定

バサルモス

状態：死亡　傾向：グラシスメタルを多数含む　大きさ：ミニ

とりあえずこれで足りるかね

カブレラネコソードとアロイシリーズを目指して頑張ってもらうとして

外にでっかい倉庫をボウグヤの隣に作ろっと

めんどくさくなった作者はキングクリムゾンを繰り出した

効果は抜群だ

「どうしようこれ、バレたらやばいし。取り合えずボウグヤに相談しよう」

建物を作った後アグナコトル亜種のミニ死体をぶち込み、ボウグヤの所に行くと

「オークの皮と狼の牙とかいっぱい集めてきたにゃ」

「きゃー！」

「にゃっ？！にゃんだ？ってご主人様かにゃ」

「え、2号？なにしてるの」

「素材集めにゃ」

素敵な笑顔。ただし全身血まみれ

「どうしたんですかお嬢様！ってキャァ」

「うん、ビックリするよね、私もした」

「子猫チャンって強い…」

あれ、なんかメイドのイメージにプラス補正されたぞ。気にしないけど

「まぁ大丈夫にゃ」

「あなたが大丈夫でも私は大丈夫じゃありません。メイドさん、出来ればこの子を洗ってあげてくれませんか？」

「ニャァ？！ご主人様ひどいにゃ！お風呂いやにゃ！」

「はいはい、わがままはいけませんよー」

困った子ね、って顔でメイドさんは2号を連れて行く

「メイドさんを困らせないでくださいね！」

あの子は力が強いから念を押さないと

「にゃー…」

その言葉で諦めたのか、がっくりとした

さて、邪魔者のメイドはいなくなったことだし

「セルベイヌのだんにゃ、結構気になってたんだがあのでかいのはなんなのにゃ」

「ああ、あれね、あなたにカブレラネコソードとアロイシリーズをつくってほしいからグラシスメタルを含んだモンスターの死骸を置いてあるの。」

「本当かにゃ！」

「ええ、でも私はぎ取りできないから…」

「それなら俺がやるにゃ、ヤラせてくれにゃ！」

「いいわよ」

「恩に着るにゃ」

思ったけど、私の作った道具ってあれらの鉱物効くんかな。ダメそうなら余った物でコーティングしよう。あと火炎袋足りなくなったら困るから火炎袋持ってるモンスターの死骸も作らないと。

第九話　仕事場錬成、および素材の確保（後書き）

長くなったお。

第十話　一号と二号の就職（ただ働き）（前書き）

（　＾ω＾）おっおっおっ

技の一号と力の二号なのに逆だと思ってたお、恥ずかしい限りだお。

第十話　一号と二号の就職（ただ働き）

さて、この前ボウグヤに頼んだ装備一式が出来上がり、一号に着せてみた。

「素晴らしいにゃ…」

「ふん、当たり前にゃ」

「ほーかっこいいですね、二号。正しくネコ騎士って感じです」

防具はまるで騎士の鎧みたいになってて悪く無いです。武器は大剣って感じですかね

「結構にやれないけど、ガンバッテにゃれるにゃ」

「頑張ってください」

「にゃぁ、私も服がほしいにゃ」

「働いてない奴が何を言ってるんですか。」

一号がアホなことほざいてるしバッサリ切る

「ひどいにゃ」

「まぁそれはいいとして、ヒーリングの練習でもしましょうかね」

「動物を捕まえてくるのかにゃ？」

「いいえ、普通にモンスターを召喚して回復させるだけですが」

「にゃるほど」

「そうですね、例の死骸置き場から地下への道を作りましょう」

「名案にゃ」

「そんなことするより領民の所に行って病気を直したほうがいいと思うんだにゃ」

「それもありですね、ちょっと父上様にお願いしてみましょうか」

「セルベイヌッ」

「あら、姉上様、ごきげんよう」

「あなた私がネコが苦手だとわかっててその亜人達を呼んでるのですか？！」

「いいえ、知りませんでした。私の下にいるのは４匹…いえ、正確には２匹ですが、これからは気をつけるよう言っておきます」

「そうしてくださいまし」

ガチャン

どうやら前回来たのはこれが理由だったようだ。まさか嫌いだったとは、全く知る気もなかった

さぁ、行きましょうかね

「だんにゃ、道具壊れたにゃ」

「早くないですか？」

「これでもかなり慎重に使ってるにゃ、あの素材が脆すぎるにゃ」

「そうですか、ではモンスターの物を使えるか試してみますね」

「よろしくにゃ」

そう言って出て行くボウグヤ

とりあえずヒーリングは後回しだね

ひとまず物を直し、グラシスメタルと凍戈竜の堅殻を貰っておく。
練習に使うのだ

「そういえばボウグヤ、人間用の物も作れるかしら」

「作れるはずにゃんだけど作ったことニャイからわからないにゃ」

「そう、暇があったら試してみて」

「わかったにゃ」

「お嬢様、よろしいですか？」

「なんでしょう」

「夕食のお時間でございます」

「ありがとうございます、わかりました」

「ではこれにて」

急がなくては

～夕食時～

「父上様、お話よろしいでしょうか」

「なんだ」

「私は魔法を練習したいのですが、どうせなら領民の手伝いついでやってもよろしいでしょうか」

「ふむ、どのような手伝いかな」

「はい、道を作ったり、家の補修をしたりです」

「そんなモノ下の者に任せ…いや、練習にちょうどいいかもしれんな。よし、護衛の者を連れて行けばいいぞ」

「そのことについてもよろしいでしょうか」

「なんだ、護衛に希望があるのか？」

「はい、私が雇っている亜人を護衛にしてもよろしいでしょうか」
「なんだと？ならん！あんないかにも弱そうな奴らが護衛など務まるものか！」
「それならば試してみてはいかがでしょうか。ちょうど私の護衛をしている子の装備ができたようなので」
「そんなモノ、試さなくてもわかるだろう」
「いえ、試さないと思い知れないでしょう。実際、あの子が素手でオークを数体倒したと言っても信じますか？」
「まさか！そんなことはありえない！」
兄の一人が立ち上がって叫んだ
「いいえ、実際に成し遂げたようですよ。信じなければ手合わせすれば一瞬です」
「そんなの信じられるか！」
「よさぬか！わかった、私の家臣を数人呼ぼう。明日の昼過ぎでどうだ、それぐらいを開けておく」
「感謝します」
「勝手にしろ」
機嫌悪いですって顔を全開にして腕を組んで座る兄

「はしたないですよ」

少し顔をしかめ注意する義母

「フン」

それに気に入らず、そのまま出ていった

「まぁ、なんなのかしら、あの子ったら」

義母も義母で腹を立てているようだ

こちらに矢先が向かわぬうちに逃げよう

「では、私はこれで失礼します」

「分かった」

部屋に戻り、凍戈竜の堅殻とグラシスメタルにひたすら錬金の魔法を掛けて形を変えようとしたけど、さすがにすぐにはできなかった。

次の日

「あ、そうそう、昨日言ってなかったけど二号今日試合ね」

「にゃ?!聞いてないにゃ!いきなり過ぎるにゃ」

「だっていきなりだもの」

「にゃー…まぁ大丈夫にゃ」
「もし勝てたらあなたは正式に私の護衛になるのよ」
「護衛？そんなの初耳にゃ…でもご主人様の期待は裏切らないにゃ！」
「フフ、ありがとう」
「にゃー私も働きたいにゃ」
一号はコックさんにするべきだし…
「そうね、昼ごはんまでに料理長の所に働かせてもらいに行きましょう」
「にゃ、それには及ばないにゃ」
「どうして？」
「私たちキッチンアイルーの服は抜け毛とかが料理に落ちるのを防ぐ意味もあるにゃ。だから服ができるまで働かないにゃ」
「でもそれまでに顔を合わせるぐらいは出来るんじゃない？」
「それもそうにゃ」
納得言ったのか、一号はうんうんと頷き
「じゃあ連れていってほしいにゃ。ついでにフクヤちゃんに注文し

てほしいにゃ」

「でも私お金ないし…」

「アイルーの人形をモンスターの素材で作ればいいにゃ。それをお母様に売りつければどうにかなるにゃ」

「なるほど、でも実際にアイルーすでにいるからどうだろう」

「モノは試しにゃ。でもそれは後回しにゃ」

「はいはい。あれ、二号は行かないの？」

「今はイメージトレーニングにゃ」

「そう、頑張って」

「頑張るにゃ！」

目に火がついたような気がしたがそんなことはありえないので無視した

「早くするにゃー」

「はいはい、急かさないで」

そして場所は代わり厨房

「すみません、料理長はいますか？」

「私ですが、お嬢様、何かご不満でも？」

「いえ、この子が料理を得意としてると言ってますが、実際どうなのか知らないのでどの程度か辛口で評価していただきたいのです」

「この亜人がですか？」

あから様にいやそうな…見下した？顔で一号を見る

それを見て一号がムカッとしたようで

「ご主人様！ヤラせてくださいにゃ！」

やる気いっぱいになった

「おいみんな、この可愛らしいネコチャンが料理してくれるってよ」

「えー本当ですかー？」

それを周りは冗談を言ってるかのように笑ってる

「ぎゃふんって言わせてやるにゃ…」

「落ち着いて、ちゃんと美味しい物を作ってください」

挑発に乗りすぎ。相手は素で言ってるようですが

「ご主人様…わかりましたにゃ！」

対する一号は目を輝かせてこっちを見る

「期待してますよ」

「はいにゃ！」

そう言って、いそいそと準備をする

めんどくさいからキングクリムゾン

「できたにゃ！」

そこにおいてあったのは…あれ、チンジャオロースのハシバミバージョンにしか見えないわ

「こ、これは…料理してる時は只者じゃないと思ったが、これ程とは…」

「フ、肉料理は得意分野にゃ。食べてみるがいいにゃ、ご主人様」

「え、私ですか？うーん、ハシバミはあまり好きではないのですが…」

と言いつつ一口

「！これは美味しい、ハシバミが苦すぎず、肉の味も引き立っている」

「お嬢様、私たちもいただいてよろしいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

料理長がまず一口

「！これは、お前ら、食べてみろ」

「たしかに料理は珍しいですが、タダハシバミと肉を炒めただけじゃないんですか？」

「いや、食べてみればわかる。シンプルだからこそ難しい、だがこいつはちゃんとできてやがる」

「フフーン」

ドヤ顔してる一号

「なるほど…」

「このハシバミの味をうまく調理してるのがすごい」

全くついていけないから割り込んでおく。それに昼飯をつくってもらわないと

「どうでしょう、しばらくこの子を置いてくれませんか？」

「ああ、いいぞ。こちらとしてもいろいろ学びたいしな」

「よろしくにゃ」

「みんなを代表して言わせてもらう。よろしく」

二人は握手していい雰囲気ですが

「では感動的な握手を終えて、昼御飯をお願いします」

「しまった！お前ら！急げ！」

「「「「「はい！」」」」」

うん、どうやらうまくとけ込めたかな…？

服調達してあげよう。あと給金はどうにかして払ってもらえると最高だけど

第十一話　手合わせ（前書き）

（＾ω＾）おっおっおっ

第十一話　手合わせ

昼飯が終わり、時間になりました。2号呼びに行きましょうかね

「2号ー、準備は出来てっ…ますね。行きましょう」

「行くにゃ！」

部屋に入ると防具を身に付け、武器を隣に置き、胡座をかいて瞑想してました。浮いてました。ビックリしてませんよ、ホントですよ

庭で待つこと一時間

外野はそこそこですね。ていうか料理人さんと一号が主な気がします。呼んだのでしょう

2号は相変わらず瞑想してます。浮いてます。周りがざわついてます。ちょっと摘める物を用意されてます。

なんだあれ

浮いてるぞ、メイジなのか？

ちがうにゃ、あれはアイルー特有の心を落ち着ける技術、ＭＥＩＳＯＵにゃ

あれがＭＥＩＳＯＵ…！

知ってるのかＲＡＩＤＥＮ

ああ、言ってみただけだ

もう黙ってろお前

がやがやしてる間に父親の家臣数人がダルそうに歩いてきます。父親は一番前で意気揚々です

「おお、またせたな。もしこの亜人が負けたらって浮いてる?！メイジなのかこいつ！」

「違いますよ父上様。だいたいわざわざレビテーションを使って精神力を使うメイジがどこにいますの」

「お、おお、そうだったな。それでだ、お前の護衛候補とそこの亜人と戦わせて、勝ったほうがお前の護衛でどうだ」

「ええ、かまいません」

「お嬢様よ、こんな可愛らしい子猫相手は心苦しいしやめさせた方がいいんじゃないか?うっかり殺しちまうかもな。ケケケケケ」

「いかにも悪役ってかんじにゃ、こっちこそ腕の一本二本切り落としてもすまんにゃ」

「んだとお！」

「よせ、サイラス。でも悪役ってのはその顔が相まって似合うな。プククク」

「てめぇ！」

「やめねーか！内輪もめしてんじゃないぞ！」

「父上様、これが私の護衛候補ですか？」

「…とりあえず違う奴らに変えておこう」

「「「えっ」」」

「もう勝ったつもりかにゃ？それは心外にゃ、さっさとやるにゃ」

「おいおい、猫ちゃんよ、俺らはメイジだぜ？負けるわけ無いだろ」

「やればわかるにゃ」

「こいつっ」

「やめろ、挑発に乗るな。さっさと始めよう」

「誰から行く？」

「まとめてで構わないにゃ」

「んだとぅ」

「それじゃあお言葉に甘えて」ブツブツ

「にゃ？！」

2号は殺気に察したのかすぐにその場から飛び退く
飛び退いた場所から生まれるのはたくさんのトゲだった。もしその場にとどまっていたら串刺しだっただろう
そして飛び退いた場所にバスケットボール大のファイアー・ボールが飛んでくる
だがそれは「行っけるかにゃー！」力任せで武器を振り、消す
「馬鹿な！」
「止めるな、結構出来るぞ」
すぐにアースハンドを使い、体を捕まえようとするが、一太刀で切られる。
「にゃ」
だがウィンドブレイクを食らい、吹き飛ぶ
「ちょっと驚いたにゃ、でも大した威力じゃないにゃ」
「馬鹿な、全くダメージをうけてないだと」
「ブレイド」
一人が青い剣を持ち突っ込んでくる
「甘いにゃ」

そこに神速で2号が駆けてゆき
「にゃ！」
「うわあああああ」
剣の腹でお腹を強く殴りとばす。
「うわ」
「ライトネス、あぶね」
「ぐ、骨が少なくとも3本は折れてる…」
「なんて馬鹿力なんだ」
「とにかく近づけず倒すしかないぞ」
「すまねぇ」
「話してる暇はあるのかにゃ！」
そう言いながら2号は剣を投げつけ、走りだす
剣はとんでもないスピードで飛び出し
「くそっ！イル・アース・デル、固定k「ガキィン！」ひぃっ」
「ウィンド・ブレイク！ウィンド・ブ「ガキィン！」」

「ウォーター・シールド！「ガキィン！」ぐぅっ」

一人ははゴーレムを錬金で作りだして固定化を掛けようとし、もう一人は魔法で逸らそうとして、最後の一人は剣がゴーレムに当たる寸前の所でヒーリングをやめて水の壁を作り出す。
固定化は失敗したが、どうにか剣を少しそらす事に成功し、うまくゴーレムに腕をクロスさせて受け止めさせる。どうにか水の壁は勢いを衰えさせたようで、ゴーレムを貫通していない。
だが水の壁を出すために杖を振ったせいでかなり痛そうだ。

「た、助かった…」

誰が言ったのだろうか、3人は気を抜いたその瞬間

「油断大敵、にゃ」

刺さった剣を引っこ抜き、それぞれの杖を薙いで切り払う

「俺の杖がぁ」

「うわあああ」

「ぎゃあああ」

「「「「「おおおおおおおおおおおお」」」」」

この試合を見ていた料理人以外の人々も含めて大きくどよめいた

対するセルベイヌの親は顔面蒼白である。その中、2号はセルベイ

ヌに近づき、剣を下に向けて膝まつく

「我が主人、セル米ニュ、勝利をあなたにニャ」

「良く出来ました」

「光栄ですにゃ」

「で、父上様、これで大丈夫でしょうか」

「あ、ああ、予想以上の強さだったぞ。あ奴らはあれでもかなりいい感じだと思ったんだがな」

「ええ、私の見立てでは最低限近接を使える回復要因の水のメイジ、攻撃の火のメイジ、最後に撹乱の土のメイジといったところでしょうか。これにちゃんとした前衛が入れば組み合わせとしてはかなりよかったですね」

「そこまでわかるか」

「ええ、ですがこの子の力はそれなりのメイジ複数相手でも出来ますので、必要ないのです」

「ああ、それは思い知った。あの剣を投げたときは自分から獲物を捨てたのかと思ったが、あの速度は避けても大ダメージであろう、むしろあ奴らが反応できただけでもかなりの物じゃ」

「分かってましたか、もしそれがわからず処罰しようとしたら止めようと思ってましたが徒労でしたね」

「うむ、あまり私をなめないでくれたまえ」

「存じております」

第十一話　手合わせ（後書き）

ここ数話余計な事書いて長くなってるから戦闘だけ書いといたお

最終話　打ち切り（前書き）

（＾ω＾）こんな終わり方で大丈夫なのかお？

最終話　打ち切り

こんにちわ

今日は村に来ています

臭いです

「イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル。ふぅ、さすがに疲れてきますね。あとはどこでしょうか」

「はい、村で必要なところは全部終わってますはい。」

「では次の村に行かせてもらいます。余計なことはしなくていいですよ」

「はい、わかりました、はい。」

ちなみに途中傭兵という名の強盗に初めて会ったんですけど普通に練習台になってくれました。主に脳のヒーリングで。意味あるかわかりませんが、とりあえずかけまくってたら相手が頭良くなって逃げました。というより演技がうまくなって機転が利いてお仲間見捨てて逃げました。むかついたので残りの人は錬金効くか試しました。

違う物質にする→砂：成功　その他：失敗

皮を錬金して石化を再現→数人犠牲にして軽く成功、練習を続けて全身可能に

というわけで気持ち悪い石像がいっぱいできたけど2号はすごいすごいって喜んでたしいいよね
全部砂にしたし

さて、こうして村を回ってるわけですが、道をつくって精神力上げる作戦は半分成功しました。

なぜ半分かというと効率が上がりすぎて全然精神力が減りません。

「なんという贅沢な悩み。それより自分の頭にヒーリング使おうかしら…」

「やめといた方がいいにゃ、もっと練習して万全を期するにゃ」

「そうね」

あ、思いついた。地下帝国の作り方

「普通に人間呼び出して掘らせればよかったんだ。ちょうど死体処理方法見つけたし。」

「にゃ、名案にゃ」

そうと決まれば帰るのみ

「ジュシャ、家に帰ります」

「…」

御者、初めて村に行く時に御者をアイルーにしてない事に気づいて

作ったアイルー。
滅多にしゃべらないオレンジ色のアイルー。当然狂信者である
キングクリムゾン
「さて、アデアット」
作るのは人間→G級ハンター→大剣使い→穴掘りスキル→食料を持てる限界まで持ってる１０人
思考能力はなく、ひたすら穴を掘り続ける。私のみ掘り方を誘導できる
こんな感じかな
「アベアット」
まずは１０人全員入らせて掘らせる、そして死骸小屋を囲むようにもう少し大きな建物を作り、死骸小屋を解体しておく。腹が減ったら飯を食うようにさせて…ご飯の時間まで部屋で設計図作っとこう
まずひたすら深く掘らせて、移動はヤマツカミの激ミニでエレベーターでいいかな。入り口の狭いツボみたいな感じで、地面以外をステンレスで固めて落ちてこない様にしよう。あかりは天井に電光虫がいっぱい集まるようにして…珍味獣の養殖をメインにしよう。ああ、横に穴をあけてまたもう一つ部屋を作ってキメラをつくろう。あとモンハンの人間も使えば人間の問題はどうにかなるかな。
まぁとりあえずこんな感じでいいでしょう

最終話　打ち切り（後書き）

めんどくさくなったから加速しちゃったお　（＜ω＞）／　テヘッ

めんどくさくなったから最終回にしたお。

ヤル気でたらこの最終回は（）ｉｆの話にしておくお。そんな日が来ない事を祈るお。

第十二話　ビストロシリーズ（前書き）

（＾ω＾）・・・

第十二話　ビストロシリーズ

護衛が決まり、早速行こうと思ったんですが。

今から行っても暗くなるだけだろうから1号のコック服でも考えようと思いました。

―Ｎｏｗ　Ｌｏ

あ、フルフルの皮で作ればいいじゃん。ばっかでー。あ、私のことだ。

という訳で早速小屋にはいってなんじゃこりゃあああ

今私の目の前には肉の塊が落ちてる。

こわい、泣きそう。

泣いていいかな

「だんにゃ、ちょうどいい所にいたにゃ、そいつを処分しといて欲しいニャ」

「え、ええええ…どうやって…」

「ほりゃ、あのまほう？って奴で消せないのかにゃ」

あ、その手があった」

「だんにゃさんもおっちょこちょいにゃ」
「はいはいお。イル・アース・デル」
お、一発で砂になった。
「それでなんかようかにゃ」
「ああ、そうそう。フルフルの皮でコックさんみたいな服作れないかなーって」
「できなくはにゃいけどどっちかというと防具寄りになっちゃうにゃ。普通のが欲しいのにゃらフクヤの奴にたのめばいいにゃ」
「ありがと、カジヤ」
「ふ、ふん」
照れちゃってーかーわいー
「じゃあ」
「さっさと行けにゃ。と言いたい所にゃが、道具一式頼むにゃ。」
「うへー、まぁいいよ、どうするの？」
「こういうのを…」
―Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ

「で、できた…もうヘトヘトだよ…」
「カジヤさん、素材集めてきたにゃ。あ、ご主人」
「ふむ、どれどれ、これは？」
「竜にゃ」
「りゅ、りゅうー？！」
「どうしたんにゃご主人様」
「い、いや何でも。あ、後でフルフル剥ぎとり手伝って」
「わかったにゃ」
「おわったかにゃ？まだまだ聞きたいことがあるにゃ」
「わかってるにゃ」
「おわったら隣の倉庫で待っててねー」
「了解したにゃ、ご主人様」
移動中
―Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ
フクヤの部屋は・・・ここかな

「たのもーってげ」
「なんですかはしたない！」
「お姉さま…なぜコチラに」
「い、いえ、決して別に一生懸命作ってる所可愛かったからとかそういうのじゃありませんわよ決して」
動揺しすぎです。
「そうですか。良かったら一匹回しましょうか？」
「え、ほんとですの？」
「ま、まぁ」
「うれしいですわ！」
「どんな性格がいいのですか？」
「甘え上手というか、お母様の子ほどはちょっと…って」
「なるほど」
顔真っ赤。なんでみんなこんなの恥ずかしがるんかな
「フクヤ、ちょっといい？」
「んー、これ終わってからならいいにゃ」

なんだか難しい顔をしながらデザイン書いてる

「それのことなんだけどね、フルフルの皮でコック服作れない？」

「む、インスピレーションが湧いてきたにゃ。あ、つくれるにゃ」

「じゃあ素材とって来るから頼むね」

「わかったにゃ」

「ちょ、ちょっとよろしいですか？セルベイヌ」

「なんでございましょうか、お姉さま」

「フルフルとは…」

「布の一種ですね。アイルー語だそうです」

「そうですか・・・よろしければそのアイルー語というのを教えていただけませんか？」

「じゃあそのかわり自分でアイルー探しますか？お望みどおりのアイルーが見つかるとは限りませんが」

「むぅ・・・わかりましたわ、諦めて差し上げます」

「ご理解いただきありがとうございます。じゃあ、行ってくるね」

「行ってらっしゃいにゃ」

「まさかああ来るとは思わんかった」

―Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ

「アデアット」

「ご主人、人がくるにゃ」

「アベ・・・はまだいいか」

「出迎えるかにゃ？」

「まだいいです。イル・アース・デル」

創り上げるのはマネキン。というか初めて作るものはなんだかどっと疲れますね。まぁいいですけど

「イル・アース・デル、イル・アース・デル、イル・アース・デル」

なまくら剣を持たせ、色を変えて服を着ているように見せかけて、ギルドナイトみたいな帽子をかぶせておく。

そして座る。

「くるにゃ」

「ふぅ」

ガチャ

「ここにいたかセルベイヌ。だれだそいつは！」
「お父様でしたか。落ち着いてよく見てください」
「む、確かになんだかおかしな感じだな…」
「人形ですよ。して、なんでございましょうか」
「いや、お前の魔法の進み具合を見に来てな。しかしよく出来ておる。今までこんなにうまくできた蝋人形は初めて見た」
「お褒めいただき光栄です。ですがこれは蝋人形ではありません」
「む、では何で作った？」
「うーん、軽くて硬い物をつくろうとしていた時に偶然できた、金属ではない硬いものです。しかし、なんなのかと聞かれたらわかりません」
「ふーむ、これは役に立つのか？」
「ええ、服を着せて、出来栄えを見たりできますね。」
「なるほど。しかしそれだけではなぁ」
「ああ、これは蝋人形と比べて軽く、かなり硬いです。刃物は知りませんが、鈍器としてなら一級品と自負しております。」
「鈍器など貴族に相応しくないではないか」

「ええ、ですから平民に与えてみてはいかがでしょうか。固く、軽い。いままでにない武器です。」

「なるほど・・・たしかにありではあるな」

「でしょう？しかしそれがいみあるのか？」

「は？」

「確かに軽く強い武器だが、ハンマーという物は重さで威力を得るものだ。相手が防具をつけていたり、盾を持っていたりする場合全く意味が無い。使えるとしても相手が防具を持たん時だ。違うか？」

「・・・ごもっともです」

「だが、この新しい物質というのはよくやった。これからも精進するがよい」

「！！ありがとうございます！」

そして、父は出ていった。

第十二話　ビストロシリーズ（後書き）

（＾ω＾）プイ

完成した話がビストロシリーズと関係無かったお…

第十三話　久々にキメラ作ってみた（前書き）

（＾ω＾　）お…

＾　）トテトテ…

第十三話　久々にキメラ作ってみた

結局マネキンの後、２号に頼んでフルフル解体してもらった。

そんで肉を砂に返し、一週間程報酬代わりに暇な時はひたすら道具の錬金をしてた、すっげー上手にできた。カジヤも「これなら行けるにゃ…」とか言ってたから良かった。

ちなみに火要らないの？って途中で聞いたんだけど端材じゃなくてまるごとだからうまい具合に加工せずに使えるよう贅沢に必要な部分だけ切り取って捨ててるらしい。

火いる？って質問にこの状況が続くのならあんな暑いのにがてだからいやにゃ。とかわがまま言ってたけど許してあげた

だから息抜きでもすることにする。

今回のテーマは馬、人間。要はミノタウロスジャニー方。ケンタウロスだー！いえーパチパチーってやってたら白い目で見られた。死にたい。

まず考えるべきなのがキリンのあの硬さだ。

頭以外の。

あれは欲しい、絶対のこそ。

そんで人間の部分。皮膚だけモンスターの物にしたり思考などの誘導や植え付けなどもできる事を確認できた。そこで思った。フルフ

ルって全身で帯電するじゃん、あれ利用して上半身帯電させようかしら。

設定
思考及び方針：絶対服従。危害を加えない。帯電の方法を知ってる。以上３つ。

アレンジ：高等知能持ち（最低でも普通の人間以上）、文字を知っている。戦闘においての学習能力が高い。

実際にやってみたら微妙。鉄の棒持ってりゃいいんだろうけど。アンバランスで気持ち悪い。口の所設定してなかったから首から上がフルフル。そして気持ち悪い。よだれが。それ以外は許容ていうか可愛く見えてきた。許す。

体はブヨブヨな皮で首から上はフルフル。体はふつくしい・・・と思わずいってしまいそうというか言ってしまったけどアンバランス過ぎてキモい。キモイ。

大事なことなので気持ち悪いおよびキモイを何度も言いましたがご了承下さい

５分後

すばらしい！この気持ち悪さがむしろいいかもしれない！

ああ！すばらしいいいいいいいい！

２０分後

ふぅ、思わず頬ずりしてしまったが落ち着いた。次を考えよう。

アレンジとして喋れるようにしたかったけど出来なかった。代わりに字を書けるようにした。作ってから気づいたけどフルフルの口じゃ喋りたくても無理だよね、ハハ…

電気袋どこにあるか聞くと上半身の方を挿した。オスメスどっち？って聞くと両方だって言われた。マジで？！まぁいいとして。電気袋は４つらしい。少ないんじゃないかと思ったら雷電袋と電撃袋が３つづつはいっててもう無理らしい。１０個か。それはそれでよく入ったな。

次ぎ行ってみよう。

ただしよーく考えてよーく考えてから

ピコーンと来た

キリンの頭をホビーホースにして全身キリンの皮で髪から背中までがキリンのたてがみ！ファンタスティック！と思うわけです。

まぁやってみましょう…と言いたいですがこの子が邪魔です。大きさはポニーぐらいにしたけど上半身で圧迫感がパない。身長１８０どころか２００行ってるだろ。頭下げてきた。可愛いお

よーしよしよしよしよしピタッ

「よだれ流さないようになったらやってあげる」

うん？書くもの？

黒板を作ってあげる。

［ヒーリングで改造して］

「やっていいの？」

［お願い］

「うーん、よだれを自分の意思でコントロールできるようにイメージすればいいのかな」

［多分続ければ進化で行ける］

「了解。イル・ウォータル・デル、イル・ウォータル・デル……」

「も、もう限界かも…」

［だいぶマシになった］

「襲わないでよね」

［守っとく］

「アイルーは通して…って2号は無理だなちょっと書き残しするからアイルー来たらみして」

［了解］

カッカカッ

これでおk

すー

―Ｎｏｗ Ｌｏａｄｉｎｇ．．．

「ふぁあ、あ、おはよう。１号、２号、えーと…」

「３号にゃ！」

［３番目の下僕］

「なるほど、おはよう」

「「おはよう御座いますにゃ！」」

［おはよう］

「じゃあ仕上げするね。イル・ウォータル・デル」

［ありがとう、できた］

「うーん、これうまくやれば喋れるかも？まぁいいや、どうやって出る？っと思ったけど錬金で壁崩して出て行ってもらって直せばいいか」

［この格好だから専用小屋が欲しい］

「りょーかい。イル・アース・デル」
壁を砂に変えるが、内側になるように…っと、できた。いつの間にかこんな小器用な事ができるようになってるとは
「また上達しているようですにゃ！さすがご主人様にゃ！」
「ありがとう1号」
「えへへ」
「あ。うう…」
2号が先に言われて赤くなってる。かーわい
「じゃあどうぞ」
軽快に3号は飛び降りてった。
「受け止めてねー」
そういうと、うなずいてくれた。迷わずジャーンプ
ふわっとなって怖いって思ったらがっしり掴まれた。
「よーしよしよしよし」
「ずるいにゃ！私もして欲しいニャ」
「ぼ、僕も…」

「はいはい、後でね」

外はもう夜だけど…

「ちゃんと言っといたにゃ！練習し過ぎでねむちゃったにゃって」

「ありがと1号、偉いぞー」

「にゃははは」

胸はって笑う一号。

チョンチョンとつつかれる

［もういいか］

おっと

「わるいね。イル・アース・デル」

創りだすのは6つの柱で屋根を支えてる大きな運動会のテント？みたいな物を作る。

それにコンクリートで壁を作っていき…

チョンチョン

［ちょっといいか］

「なーにー？」

［出来れば密封したほうが寒くなくていいのだが。］

なるほど

「わかった。イル・アース・デル」

すべてつなげてコンクリートの大きめな小屋？を創りだす。入り口を開けて。

ちらってみてみると頭を下げた

「どもー。同居人いいですか？」

［異論などありませぬ］

「よかった。今度声帯及び口の筋肉とか改造しますね」

［ありがたし］

「じゃあ、どうぞ」

そのまま入っていった。

よーし、ケンタウロスみたいに人の上半身があって馬がキリンはそのままだけど、上半身を筋肉とかなくてただ人間のラインを保ってだけにして、目と口と鼻をつける。顔だけ見れば白人より白い人間だわ。たてがみもあり、ホビーホース（キリンｖｅｒ）を持って、馬の部分に棒の部分を刺す所を作っておく。２つ。片方はホビーホ

ースでもう片方が通電性抜群と思われるキングロブスターの素材でできた槍。

設定

思考及び方針：絶対服従。危害を加えない。この体での雷の落とし方法を知ってる。以上３つ。

アレンジ：高等知能持ち（最低でも普通の人間以上）、文字を知っている。戦闘においての学習能力が高い。

持ち物：キリンヘッドハンマー。エビランス。

よし。こいやこら

お、おぅふ

なんて神々しいんだ…

「す、すごすぎるにゃ…さすがご主人様にゃ！」

1号はキラキラした目で両手を祈るポーズで見上げながらその目をこっちに移してくる

「・・・」

2号は黙って警戒態勢に入りながら剣を構える

「なんだ貴様」

「げぇ…」

なんか嫌な感じの性格かこれ。詳しく言えば見下すタイプの

「おお、これは主、ご機嫌麗しゅう」

「は、はぁ」

「私にご命令があるのならなんなりとお申し付け下さいまし」

４号…なんか面白そうな名前を名乗りそうだから（仮）をつけとくは跪いて手を持ちキスをする。人間の騎士なら絵になっただろうが残念ながら純白のケンタウロス。私的にはありだけどね

「あなたは改良型でその前身がいます。ですが前身だからといって劣っているわけではありませんのでご注意いただきたい。そして私の下僕とは仲良くしていただけいいたい。」

「仰せのままに。ところで前身とは一体…」

「あなたは彼（彼女かなぁ）と一緒の所に住んでもらいます。また、そのランスは彼に上げてください。もとより私はそれを彼に渡すために持ってこさせたのだと」

「そのようなご意図が…おみそれ致しました。では早速」

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－－－－－－－－

Ｎｏｗ Ｌｏａｄｉｎｇ．．．

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

Now Loading．．．

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

「っ！どうしよ、なんて言い訳しよう」

「俺らのことか」

「そうですね」

「森にでも行きましょうか」

「そうする」

「また夜に会いましょう」

「またにゃー！」

「ま、またにゃ」

「どうした2号殿、私が呼び出された時ぐらいの気概を見せなされ」

「え、でも…」

止めようと思ったら1号が止めてた

「人それぞれにゃ、普段は気が弱いけど戦闘時はそうも言ってられないからそうなったんにゃ！と余計なことというにゃ！」

「む、それは済まない、２号殿」

「う、うん、ありがと」

一件落着…？

さっさと独り立ち（フリ）か殺された（フリ）して隠居も目安に入れようかねー

あ、大隆起ってのあるんだっけ。穴掘ってもらうか。

第十三話　久々にキメラ作ってみた（後書き）

二回目のＮｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ．．．の後にもう一つＮｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ．．．あった理由は

４号

「おお、なんと見難い」

３号

「誰だお前」

みたいなイベントあったからです

でも面倒なので飛ばしました

そのあと

私はありだと思いますが私の美的センスにケチを付けるつもりですかそうですか。

ってセルベイヌ言ったら受け入れるようになった。って落ち

今回ヒーリング極めてからつくろうと思ってたけど我慢できず作って結局テンション上がりっぱで口調が砕けつつあった感じだとわかる程度ならいいな

第十四話　解決法（前書き）

ω９）トテトテトテ

（９ω９）おっおっおっ

第十四話　解決法

あー楽しかった。もうホントどうしよう。このまま自分のキメラ王国作りたいお。

でもなぁ…土地ないし…親とかに説明しようがないし…

いっそ地下帝国つくろうと思ってたけど酸素とかどうやって送るかってなってめんどくさくなって…

あー、土地を変える国とか作れねーかなー

おおっと、口調が崩れすぎだわ。

ナニがともあれお休み…

Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ．．．

次の朝

「ふぁあああ、よく寝た。」

「お嬢様」

「ん」

待機していたメイドに着替えさせてもらう。

「朝食の用意が出来ました。」

「疲れてるから部屋で食べる」

「承知しました。」

「うーん、お姉さま用のアイルーは…ご飯後にでもしようかな？あ、でも一生懸命頑張ってるのが好きみたいだし…うーん、趣味は…」

こんこん

「どうぞ」

「失礼致します。今日はお嬢様が連れてきたいちごー、でしたっけ？とにかく彼女が考案したというハンバーグという物とスパゲッティという物があるそうですよ」

まじか

思わず笑いそうになる

「おお、それは楽しみですね」

「フフ、ではお食事を終えたらお呼びください。」

「うん」

どうやら嬉しいかったのだと勘違いしてくれたようだ

「うん、味は結構結構。」

さぁ、どーしよっかなー

Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ．．．

「アデアット」

アイルー　♀

名前：オリガミ　色：桜

思考能力：あり　趣味：折り紙

姉は土のトライアングルだし、行けるよね…？あ、私が作って見本を渡せばいいんだ

あ、メイド達に連れてくるって言っといたけどこの際創るか？いや、一応報告したほうがいいかもしれない…あとメイドアイルーとか創ったらクビにされちゃうかなぁ…

演算結果

有能な場合

試しに入れると６７％の確率で総入れ替えを望みします

少数のみの提供でもメイドに不満が出る確率が高いです

ちょっとドジな場合

多少ドジっ子を入れてもむしろ愛嬌として寛容な対応をされます

数が多くなると苦情来る確率７６％

アニマルセラピーの効果を期待できます

うん、ドジっ子を１，２匹にしよう

アイルー♂

名前：コロブコ　色：クレープ

思考能力：あり　特徴：よく転ぶが、物は壊さない

アイルー♀
名前：ハシバミ　色：アメショー
思考能力：あり　特徴：摘み食いをする

これ…いいのかなぁ…演算ではこれで大丈夫って出てるし…いいかな？

はぁ、それにしてもキメラを見てたらまた作りたくなってくる。でも柵(しがらみ)がある。切り捨ててもいいけどもったいないという気持ちがある。どうしよう…

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――
「セルベイヌ、森の奥で雨もなくただ雷が多発しているらしいから入らない様にするんだぞ」
「はい、父上」
Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ．．．
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――

夜

「ふむ、また我らのような存在を作りたいと。なら作れば良いではないか」
「つくりすぎは良くない。」

「なぜだ」

「そりゃあめんどくさいからだよ、君たちの事どうやって説明すればいいのさ」

「言いたい奴らに言わせておけ、力でねじ伏せてやる」

［主人に害が及びかねない。口を慎め］

「む、そんなわけ・・・そうか、そうだな。熱くなってしまった、すまない」

それに対し3号は頷くだけ

「そうだよねぇ…」

「そう言えば1号と2号はどこだ、特に2号だ。奴と手合わせしたい」

［私も］

「二人とも最近はしゃいで疲れてるから早めに寝てるよ」

「む、残念だ」

3号もどことなく残念そうな雰囲気を漂わせている。

「あ、そうそう、あなた達雷使いすぎだから」

「む、承知した。今後は控えよう」

［私は？］

「うーん、落雷じゃないけど控えめで」

［了解］

「あーどうしようかなぁ」

ツンツン

3号が土をこねてなにか作った。泥人形…土人形だ

「なるほど、ご主人、錬金でそれミニチュアを創るのはどうかね」

「おお！ありがとう！」

「ふふ、どうということない」

［例には及ばない］

「うん、とりあえず3号声帯どうする？」

［私は悟った。これは個性。だからいらない］

「そ、そうなんだ」

よーし、作って作って作りまくっちゃおう！人形よりより精密な物が作れそうだし…ふふふ

あーでも切り替えの練習のほうが先かしら

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4138u/

ゼロ使にチーターあらわる

2011年10月14日20時41分発行